

信 仰 の 在 り 方

信仰は元より自分と父なる神と其独子なるイエス・キリストの間に与えられた御恩寵であります。それ故に必ず自己の信仰のハツキリしたところから信仰生活が當まれるのであります。然し又自分で暮しているのではないから信仰生活はそのまま生きている社会と社会生活即ち其家庭に、その環境に、その民族に、その国に、又この世界に、深い関係があるのであって單的にいえば敗戦日本に日本人として日本青年としての信仰生活の在り方が必然的に當まれて居らなければなりません。信仰生活は決して修道院の生活の様に社会から離れ、これを傍観しながら、独自の生存をつづけて行くものではありません。

私達は皆キリストに捉えられ、キリスト・イエスを信じて信仰生活をしているのですから、誰もその信仰の方向は同一であり、その目的も同一であります。けれどもその人その人によつて、信仰の理解に於て、信仰の進歩に於ては、其場が同一ではありません。それ故に、私達は自分の信仰によつて自ら判断した信仰生活があるのであって、ただいたずらに他人の真似をしたり、形式のみを主にして、謙遜を失つたりする無意味な行動があつて

はないのであります。それはカソリックであります。

基督者の信仰に三つの誤った型があります。その点を私達はよく弁えて居なければなりません。第一は、自分はいつも迄も不完全であつて常に悔改めの連續をもつてこの世を終るのが信仰生活であるとしている者、即ちいつ迄も不完全で完全な救いを求めて不安の日を送るものであるとする者。第一はその反対で救は凡て神とキリストの側にあるのであるから、それを信じて居るだけで他の一切の自分の行為や精神は不必要である。我らの救いは完全で救いから洩れるものではない。絶対の安心を持つべきで少しでも不安があるのは不信仰であるというものの第二は救いは神に於て完全であるが、全く我が身が潔められる迄は不安の日が続くのであって、全く清くなる迄努力して、その潔きに至つて救いは全くなるとするものである。以上三つの信仰ほ、決して聖書に示されている信仰の在り方ではありません。もう一度ペリピト書第三章九節 - 十五節までを読んで見るならば、真のクリスチヤンとこう者は神の救いの聖業の完全なることを絶対に信するものである。其点不安は何もないけれども、同時に自己の不完全さを一層深く自覚し己が内にキリストの形成する迄、神の完全な救いを己が内に実現する様に努力してやまないもの「唯この一事を務む、即ち後のものを忘れ、前のものに向いて励み、標準を指して進み、神のキリスト・イエスに由りて上に召し給つ召にかかる褒美を得んとて、これを追求む」のである。今我らは完全に清められているのでもなく、清められる必要がないのでもなく、何時清められるか不明であると言つのではなく、信仰に於て完全なる平安を持ちつつ、現実に於ては懼れおののき、おのが救いを完うせんとしている事が、クリスチャンの信仰であります。ルッターの申しました様に「クリスチャンは出来上った者ではなく、出来つつ

あるものである」というのが本当の姿であります。

即ち、神の完全な救いに対し、全き信頼を持ちつつ不完全なる自己の肉を殺してこれを打ちたたきながら猛進して行くその全過程に於て、クリスチヤンの信仰生活と全き信仰の人格が成り立つのであります。キリストの救いに對して、徹底的な信頼を持たないものは不信仰であり、神は義とし給わない。然しこれを信じたからといって、既に自己がその凡てを獲得した様に思つて自己の努力をしないものは、神を救いの方便としているもので、眞の信仰ではない。神を絶対に信じつつ、今日も明日も、血みどろの信仰の闘いをもつて前進する者がキリスト者であります。

青年諸君、我らは本物の信仰に生きなければならない。オリンピック選手が決勝点に向かう時の心の状態を思つてみるとことが出来るでしょう。我らは信仰の馳場をそれ以上の真剣さ、緊張、挫けない勇気と意氣とをもつて力強く走つてゐるのでなければなりません。昨日のことは忘れて明日の行程に全速力をもつてなし得る限りを為して走らねばならない。即ち、走り終つた過去が何であれ忘れて了つて、自体を前に伸し足を高くあげて突進することであります。自分の誇りも、罪も、受けた迫害も、も早、いつ迄も気にしたり顧慮したりすることなく、只前進あるのみという生活であります。いつの祈りにも悔改めは大切であるが、それ以上に罪赦されて雄々しく立上つて、使命感に生きるのがクリスチヤンであります。自分の肉の誇りや、此世の享樂を捨て切らずして悩む果て強がりをするのも愚劣であるし、自分の過去の罪や過失を思つてメソメソと意氣銷沈して戦々惱々(きょうきょう)、自己反省も結構だが何時も懺悔型の人間、熱いか寒いか分らないお天氣の七面鳥の様な人間でも困る。キリスト者の態

度はそんなものであつてはならない。私は諸君が、神に捉えられ、キリストに選ばれた選手たるの自覚をもつて生きて貰いたいのです。信仰の闘いを雄々しく闘うキリスト者であつて欲しい。キリスト者は神に向つては懼れ戦き、消極的事もあるがこの世と人に対しては常に積極的でなければならない。私は信仰生活の原理的のことについて述べたいのであるけれども話を一步現実の問題に進めて行きたいと思います。

この八月十五日は日本完敗の日であります。昭和二十年八月十五日から丁度足かけ五年日満四年の歳月が閲せられたのである。而も相变らず、米国の居候であり、八千万人の俘虜生活であり、米ソの間に挟まれた、サンダーウィッチ生活であります。而も内に蔓延（はびこ）るもののはヒリズムの腐類思想と、共産主義の唯物思想であつて、共に神なきを誇りとする思想であります。全くクリスチヤンの信仰と正反対の者が祖國に蔓延（はびこ）つて居ると申して過言ではありません。「我はしばしば汝らに告げ、今また涙を流して告ぐる如く、キリストの十字架に敵して歩む者なければなり。彼らの終りは滅亡（ほろび）なり、己が腹を神となし、己が恥を光榮となし、ただ地の事のみを念つ」とこうパウロの言葉こそ、ピッタリと今の日本を指して我等に示して居るのではないかでしょうか。「兄弟よ、汝ら諸（もう）共（とも）に我に徴づ者となれ、且つ汝らの模範となる我等に従いて歩む者を視よ」とパウロは私達に迫つていつてゐるのであります。一一バー教授も申されてゐる様に、少くとも共産主義者の眞面目なる人達は決して自分の事のみを考えていません。彼等の社会原理と経済原理と政治原理に立つて、あくまでも、社会の不正不義と、社会の困窮者、働く者の味方として、所謂闘争をもつて共存共栄の社会を現出せんとしている努力と生活は愚かでも光の子なのであります。然らば、我等キリスト者は光の子として彼等より以上の使命と責任を日本人として、この慘め

な祖国に生きる者として持たない筈はない訳である。神の教会は福音を宣べ伝える所であると共に、「己れの如く
その隣を愛する」その愛の実践の社会でなければならない。社会のセンターとして世の重荷と十字架を負つべき
ものが、我等の群でなければならぬ。我等は政治的に、経済的に、世に活動すべきものではないけれども、少
なくも同胞の墮落、腐敗、道義の廃穢と悲惨と不義に対しては、神につける活動があるべき筈であり、特に、平
和問題に関して、戦争放棄に対し、少くとも再び、日本民族を過（あやま）たしめぬためには、血を流し死をもつてもい
れを救うべき大責任を持つてゐると信ずるのであります。全く新しい日本を造るために、平和な日本を生む為
に、平和な世界となる為に、どれだけ真剣な研究と、自己の見識が養われてゐるか。その為に、自分の生涯の設
計を如何に考へてゐるか、平和な日本、無抵抗の真理をもつて日本を守り、道德再武装（M・R・A）を本当に
祖国のものにするのには如何に活動しなければならないか。その指導者はクリスチヤン以外にない事を果して自
覚して居るか。ここに会する諸君の全部が伝道者になつても教育者になつても、指導者になつても、とてもとて
も日本を救う実力とはならぬ位の大問題であります。百年二百年の歴史の彼方に於て、成就すべき目標なのであ
ります。然し、この目標は成就しなければならない。大いなるスケール、神の計画として成就しなければならな
いのであります。「全日本をキリストへ」と云ひのが五ヵ年計画の伝道の目標であり「天の門」は日本に開かれ
たのである（何十万の犠牲と原子爆弾に由つて）キリスト者こそこの責任者である。絶対の正直、純潔、愛、無
私、この四つのものがオックスフォード・ムバメントとして米国フィラデルフィヤの牧師フランク・ブックマン
氏によつて一九二一年に提唱されて以来、今日はM・R・A運動として第一次世界大戦後大い強調され、イス

に開かれて居るのであるが、今の日本にはこれを受けるだけの精神的靈的な準備は何もない。もし、これに呼応出来るとする者ならば、不完全ながら我等キリスト教会のみであると私は断言します。日本に欠けているもの、教育勅語にも無かつたもの、神道にも仏教にも欠けているもの、そして今の社会に全く無いもの、それは正直、純潔、愛、無私、の四つであります。これは單なる徳田ではない。所謂道德でもない。それは神に交わる事の出来る、神中心の社会にのみ通用する。キリストの教会にのみ現存する無上の価値であります。天に属する、美しい靈の結ぶ所の実であります。惡魔とその世界、肉慾と惡の世界には咲かない花であり、実であります。今の世は正直者は馬鹿を見、正直は決して通用しない。今の日本の巷には純潔は無い。青年男女の直操觀念、酒や煙草に対する潔癖は日本のピュリータン的な教会性格から消えつつあります。金銭上の間違いや、利口を貪ること、澆職は茶飯事であります。清廉潔白という日本文字は辞書から抜けて泥に塗れている。肉的の愛工口スは、肉体文学となり、愛なき世界、虚無、ニヒリズムは文学の根底に横たわっている。神の愛、キリストの愛（アガペー）講罪愛は日本の何処にあるか。戦災と引揚げとに苛まれた同胞を己の如くその隣りを愛することが行われて居るか。徒らに徒党を組んで鬭争をもつて愛の運動となつて居るのが現状ではないか。私無き行動、私無き生活が成り立つか。自分が生きて行くのにやつとではないかと弁解している。而も酒や淫樂に消え去る金は何百億円を数えている。安本計劃は決して進まない。不平不満は自暴自棄の世相を示している。かかる日本、祖先の国を見て、かつてエルサレムの滅亡を予見して涙を流し給いしイエス・キリストを信ずる我等、キリスト者、若き血に燃ゆる諸君が腸を注ぎ出ださずして可なるやであります。祖国を愛し、キリスト・イエスが我等を

愛し給いし如くに隣人を愛すること」いや、神の誠としている。我等は果してこのままよいのでしょうか、日本のキリスト教会の現状についても、私には意見がある。国際キリスト教大学を初め、ミッション・ボードの活動に対しても私には憂いがある。頼むべきは只主イエス・キリストと我が愛する北一条教会特に諸君である。六年の歴史を持つ我教会の信仰の伝統こそは神の示し給いし正統のものであります。聖書と聖靈の示し給いし信仰であると信じてゐるのであります。

諸君、信仰を新たにして戦闘の教会とならねばなりません。祈りに赤々と炎燃ゆる教会とならねばなりません。毎聖日礼拝に勢揃いして神の言とキリストの恩寵とを頂き、固き信仰をもつて、社会の職場に打って出なければなりません。祈り会に皆顔ばかりでなくその信仰と性格とを識り合い、本当に相愛し相扶け合わねばなりません。男子も女子も一つとなり、希くば信仰の家庭を『えられる位の信仰による一致をもつて、その分野にキリストの為に働くものとならねばなりません。

メソメソと口の罪に泣くよりは、キリストの救いを信じて、信仰の馳場を走り、祖国の救いの為、隣人への愛の奉仕に残る生涯を捧げねばなりません。これが、信仰生活の在り方であります。我等の夢は大きい。小さい自己中心の夢は捨てよ。キリストに由る働きに生きよ。これこそ信仰の在り方であります。無防備平和日本を築くものはクリスチャンの外には絶対にないであります。神は我等の祈りを聞き給う。

諸君、面白おかしく暮しても、たかが五十年の人生、何かあらん、である。永遠の生命なるイエス・キリストに生きる道こそ、信仰生活の祝福である。

「己が生命を救わんと思つ者はこれを失い我が為に己が生命を失つものは之れを得べし」という聖言を我が生涯とするのが信仰生活であります。

(一九四九年八月一日、野幌に開かれた青年会修養会にて)